

小・中学校

平成 13 年 度

教 育 研 究 員 研 究 報 告 書

教 育 課 題

東京都教職員研修センター

**平成13年度
教育研究員名簿（教育課題）**

地 区	学 校 名	研 究 員 氏 名
港 区	青 山 小 学 校	花 島 誠
文 京 区	根 津 小 学 校	○ 冨 野 井 敏
大 田 区	山 王 小 学 校	緑 川 陽 子
杉 並 区	和 泉 小 学 校	加 藤 英 城
江戸川区	松 本 小 学 校	若 山 俊 彦
三 鷹 市	第 一 小 学 校	○ 末 永 寿 宣
西東京市	栄 小 学 校	冬 野 陽 一
多 摩 市	北 諏 訪 小 学 校	小 川 和 子
墨 田 区	吾 嬬 第 二 中 学 校	◎ 木 川 卓 也
世田谷区	緑 丘 中 学 校	田 村 登 美 子
豊 島 区	西 巢 鴨 中 学 校	山 本 英 行
小 平 市	小 平 第 二 中 学 校	佐 藤 敏 数
日 野 市	三 沢 中 学 校	井 田 久 雄

◎世話人 ○副世話人

（担当）東京都教職員研修センター 統括指導主事 伊 藤 清一郎

目 次

I 研究主題		
1 主題設定の理由		P 2
2 研究の仮説		P 2
3 研究の構想		P 3
4 発達段階と規範		P 4
II アンケート調査の内容・考察		
1 調査のねらい		P 5
2 調査の内容・方法		P 5
3 調査の結果・考察		P 6
III 授業にあたって		
1 小学校分科会の授業にあたって		P 10
2 中学校分科会の授業にあたって		P 11
IV 実践事例		
事例 1 (小学校 4 年、体育)		
1 単元名「ネットボール」		P 12
2 単元のねらい		P 12
3 視点との関連		P 12
4 ゲーム・ボール運動領域の発展・系統		P 13
5 学習過程		P 12
6 本時の学習		P 14
7 授業を振り返って		P 15
事例 2 (小学校 6 年、体育)		
1 単元名「集団マット運動」		P 16
2 単元のねらい		P 16
3 視点との関連		P 16
4 器械運動領域(マット運動)の発展・系統		P 17
5 学習過程		P 16
6 本時の学習		P 18
7 授業を振り返って		P 19
事例 3 (中学校 3 年、特別活動)		
1 単元名「心地よいクラスを作ろう」(学級活動)		P 20
2 単元のねらい		P 20
3 指導の重点		P 20
4 学習過程		P 20
5 本時の活動		P 21
6 授業を振り返って		P 23
V 研究の成果と今後の課題		
1 研究の成果		P 24
2 今後の課題		P 24

Ⅰ 研究主題 自律的に行動する子どもを育てる指導法の工夫

— 体育・学級活動の指導を通して —

1 主題設定の理由

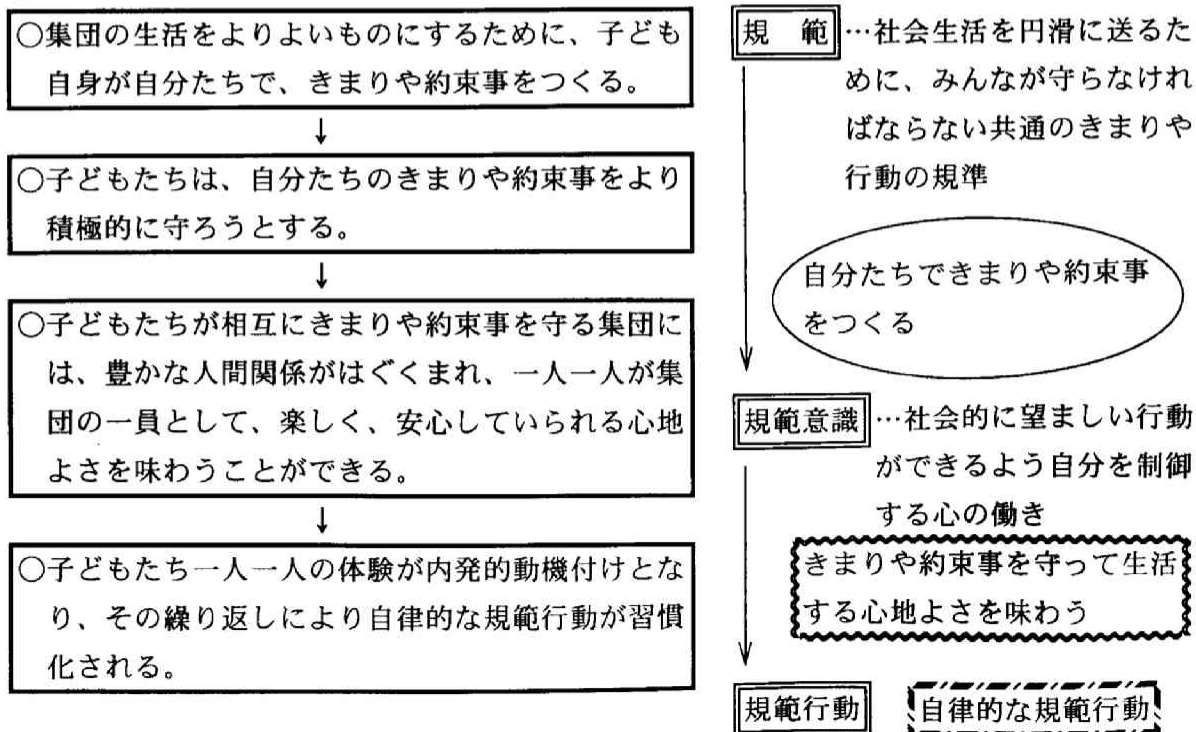
学校教育において、児童・生徒が心身ともに健康であり、自ら課題を発見し解決できる、人として調和のとれた発達を促す教育活動を推進しようと努力している。しかし、基本的な生活習慣がしっかり身に付いていない、豊かな人間関係が築かれていない、規範行動をとることができないなどの要因から、「挨拶ができない。」「ルールを守れない。」というような具体的な形となって児童・生徒の態度や行動面の問題が表面化している。

従来、子どもたちの規範意識が低いから規範行動がとれないと考えられていた。しかし、昨年度の都立教育研究所・特別研究推進室の研究では、子どもたちは一定の規範意識はもっているのだが、意識と行動にずれがあり、意識はしているのだが、行動が伴っていないという実状が指摘されている。実態調査によると、小学生も中学生も学年が上がるにつれ、規範行動がとれない傾向にある。ここからも、『善悪はわかっているが、規範行動がとれない。』つまり、規範の意識はあるのだが、行動化することができない姿が見受けられる。

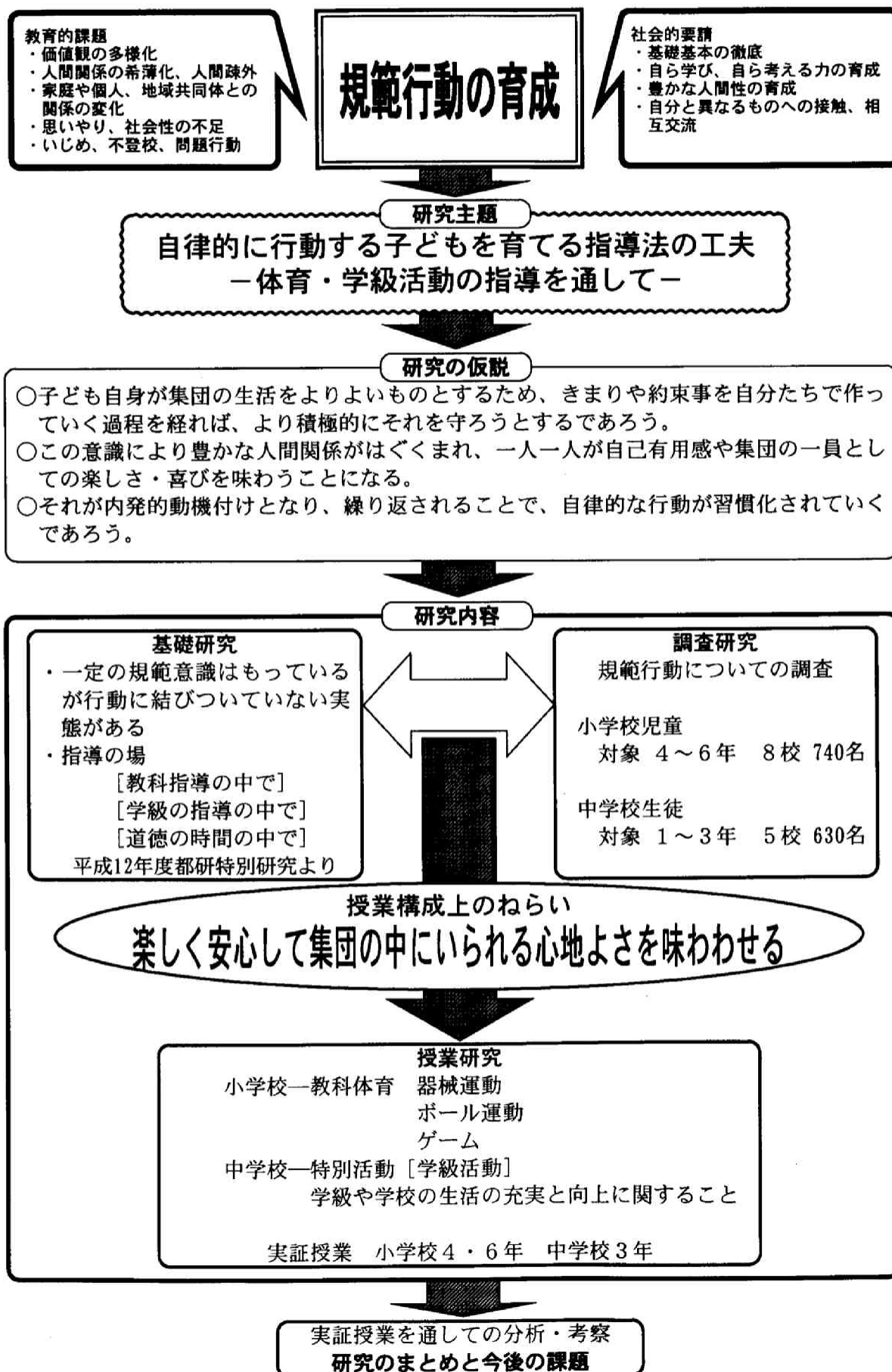
これらの問題は、児童・生徒の心身ともに健やかな成長をはぐくむうえで、大きな課題点となっており、決して見過ごすことはできない。そのことをふまえ、本主題を設定した。

2 研究の仮説

子どもたちの規範意識と規範行動とのずれは現実としてあるものの、少しでもその差を縮め、実践力を育成していくことが、今求められている。そのため、子どもたちの内面で規範の意味を納得させていく取り組みを進めるとともに、様々な体験を通して規範行動の実践に結び付けていく取り組みの工夫が必要であると考えている。そこで、研究の仮説を次のように設定した。



3 研究の構想



4 発達段階と規範

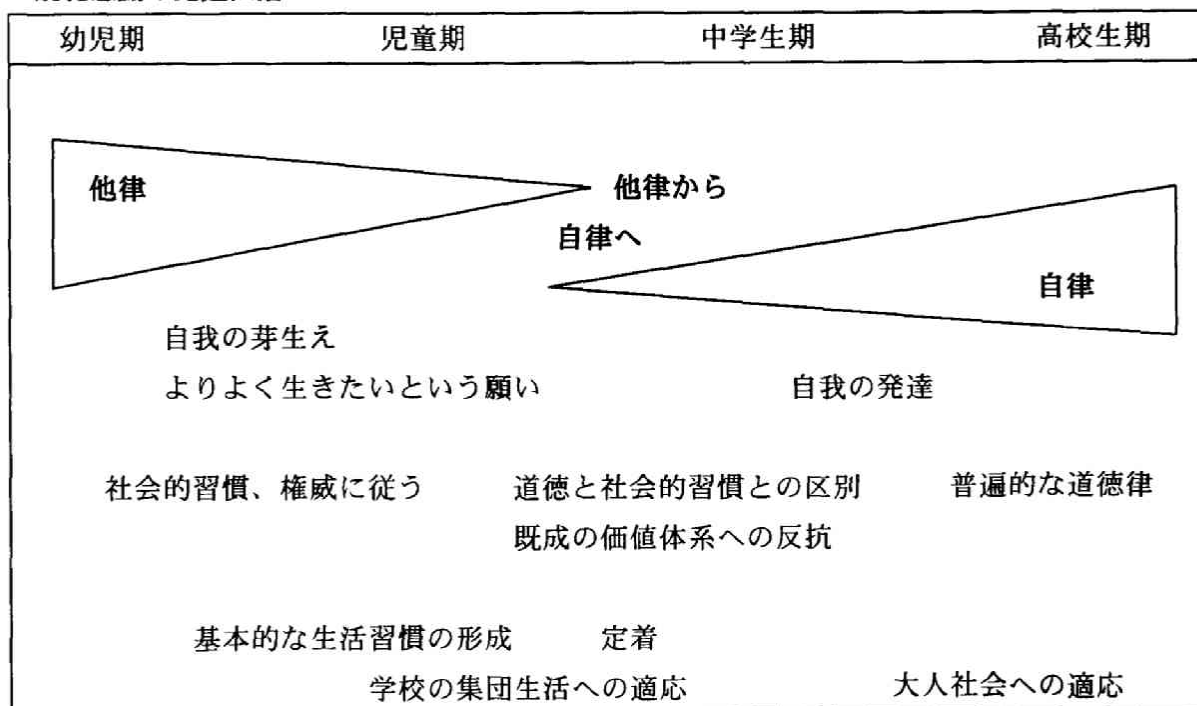
子どもの規範行動は、基本的には道徳性の発達の中で、他律から自律へと変容していく。幼児期や児童期初期には保護者や周りの大人から「よい」とされる行動を規範ととらえ、そのまま自分の行動の基準とする傾向が強い。他の児童がその基準からはみ出した行動を取ると、「そういうことをすると先生に言いつけるからね。」とか「そういうことを言っちゃいけないってお母さんが言ってたよ。」というのは、その子どもの規範意識が教師や保護者に依存する他律であるとみることができる。

下の図にもあらわれているように、規範意識が他律から自律に移行するのは、一般的に小学校中学年である。これは学校生活の中でも顕著に見られる。教師のアドバイスとは別に、自分の行い方に価値を見だし課題を進めていくことができたり、清掃や係活動の必要性や価値を認め主体的に行動できるようになったりするのはこの時期である。

そこで本研究では、対象を自律性が芽生える小学校中高学年からとし、学校での生活や学習活動のなかで児童・生徒の規範意識を規範行動につなげていかれる指導の工夫を研究することとした。

しかし、自律的な規範行動が取れるようになるためには、幼児期や小学校低学年の学校での生活や学習活動における指導が重要になってくるのは言うまでもない。集団活動の中でのしつけ、あるいは基本的な生活習慣の確立は必要不可欠である。

規範意識の発達段階⁽¹⁾



(1) 『規範意識をもち自律的に行動する子どもの育成に関する研究』

Ⅱ アンケート調査の内容・考察

1 調査のねらい

本調査は、「規範意識をはぐくみ、自律的な行動を習慣化していくためには、どのようなことを指導し、内面を育てていったらよいか」を明らかにするため、「学校生活でのルールやマナーに関するアンケート」を実施した。ねらいは、以下の通りである。

- 1) 学校生活における規範行動の実態をつかむ。
- 2) 行動の実態の裏側にある児童・生徒の心理的傾向を知る。

2 調査の内容・方法

小学校4年生～6年生、中学校1年生～3年生を対象として、小中共通6項目、小中別3項目、全9項目について調査を実施した。

- ・実施時期；平成13年7月上旬
- ・対象校数；小学校8校、中学校5校計13校
- ・対象人数；小学校4年生240名、5年生254名、6年生246名
中学校1年生227名、2年生202名、3年生203名

<小中共通6項目>

- 質問1：授業中にふざけたり、おしゃべりをすることがありますか？
質問2：そうじ当番をさぼることがありますか？
質問3：学校のろうかや階段で走ることがありますか？
質問4：教室や校庭にゴミをすてることがありますか？
質問5：学校でお菓子を食することがありますか？
質問6：授業の始まりに遅れることがありますか？

<小中別3項目>

○小学校

- 質問7：学校のボールを使ったあと、片付けないことがありますか？
質問8：先生にあいさつをしないことがありますか？
質問9：友達に暴力（言葉の暴力もふくむ）をふるうことがありますか？

○中学校

- 質問7：遅刻をすることがありますか？
質問8：忘れ物をすることがありますか？
質問9：学校の物（公共物）を壊したり、いたずらをすることがありますか？

それぞれの質問項目について、まず行動の実態を4つに分け、選択回答した。

①まったくない ②ほとんどない ③たまにある ④よくある

さらに「自律」と「他律」の観点から、心理的傾向を5つに分け、選択回答した。

①②と回答した（規範行動がとれている）児童・生徒は、以下の項目から選択する。

- ア 規範の意義を考えた気持ち（自律的）
- イ 公共心や習慣化された気持ち（自律的）
- ウ しかられないためにという気持ち（他律的）
- エ 仕方ないという気持ち（他律的）
- オ その他

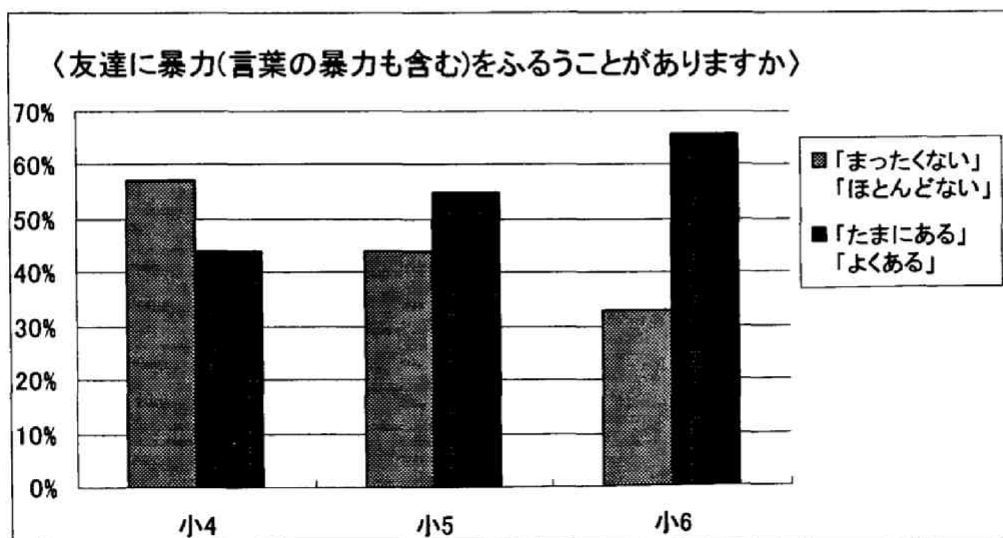
③④と回答した（規範行動がとれていない）児童・生徒は、以下の項目から選択する。

- ア 自分中心でわがままな気持ち（自己中心的な気持ち）
- イ 自分なりの必然性がある気持ち（自己中心的な気持ち）
- ウ 他律的でしかられないからという気持ち（他人に影響された気持ち）
- エ 付和雷同的で他人に流された気持ち（他人に影響された気持ち）
- オ その他

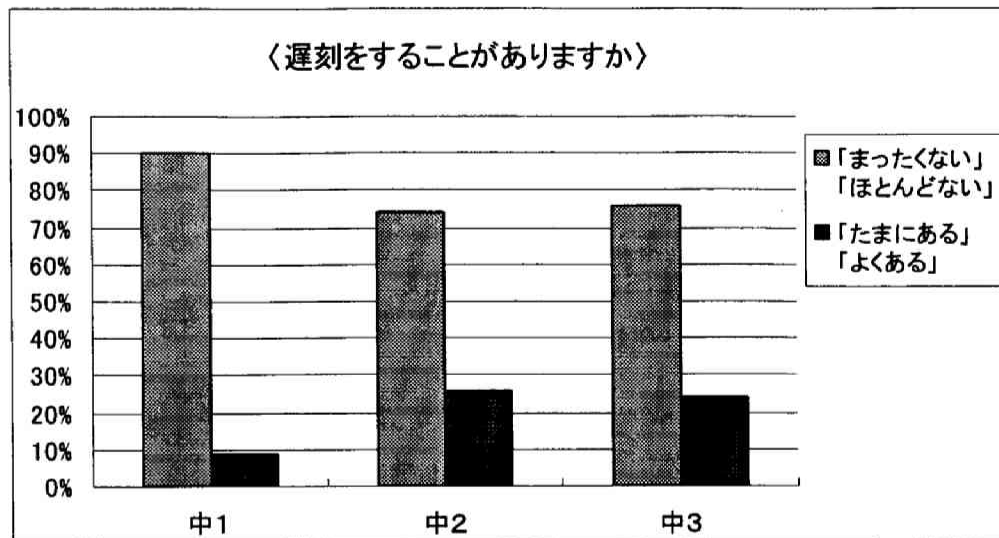
3 調査の結果・考察

(1) 小・中学生とも学年が進むにつれて、規範行動がとれなくなる。

<小学校>

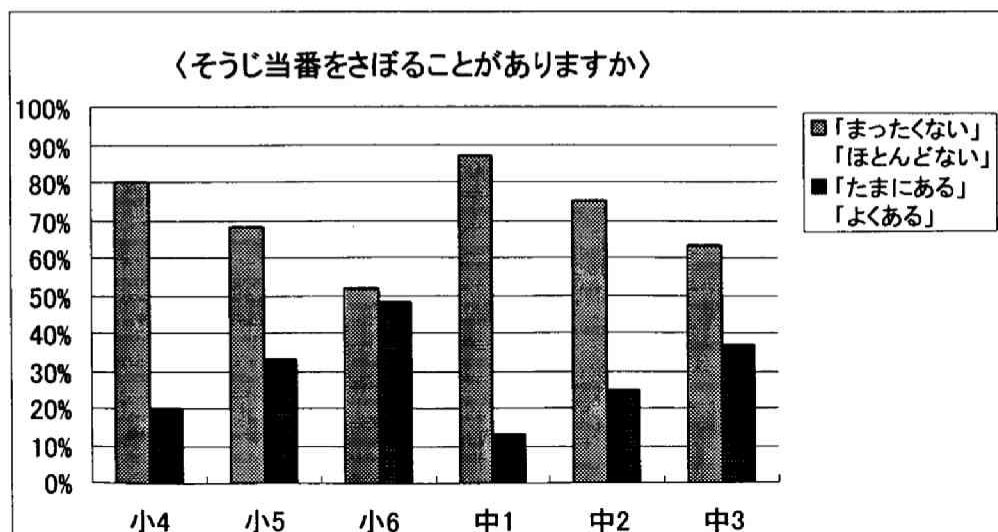


< 中学校 >



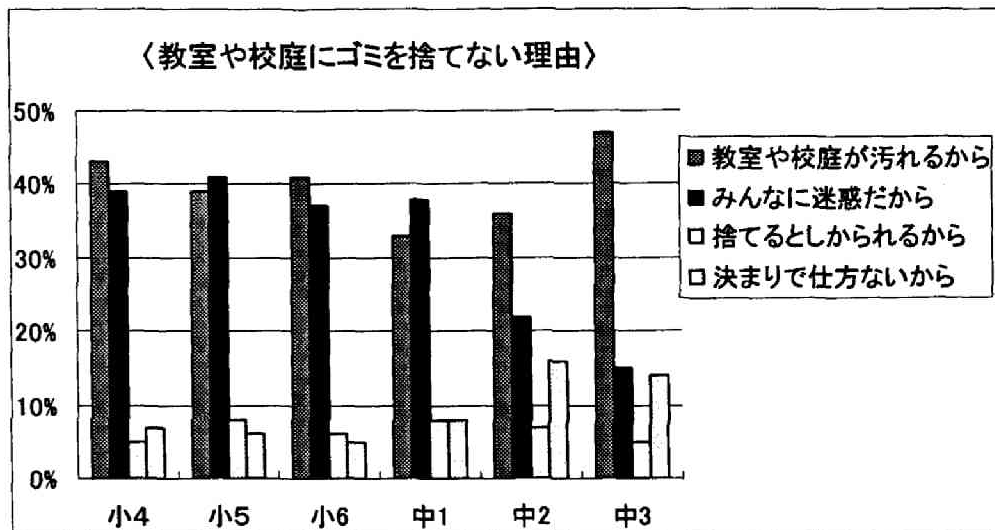
図のように小学校の「友だちに暴力をふるうことがありますか。」や、中学校の「あなたは遅刻をすることがありますか。」の結果を見ると、学年が進むにつれて、規範行動がとれなくなっている。これは、一つの環境の中で生活を続けているうちに、「楽をしたい。」という気持ちや「これくらいはいいだろう。」という甘えが出てくるのかもしれない。また、学年が進むにつれて、まじめさをからかったり軽視する雰囲気が強まることも考えられる。しかし、質問項目によっては、中学校2年生より3年生の方が規範行動がとれているケースがある。これは、進路を意識して自律的に行動する子どもが出てくるためと考えられる。

(2) 中学校入学時に規範行動をとれる子どもがいったん増える。



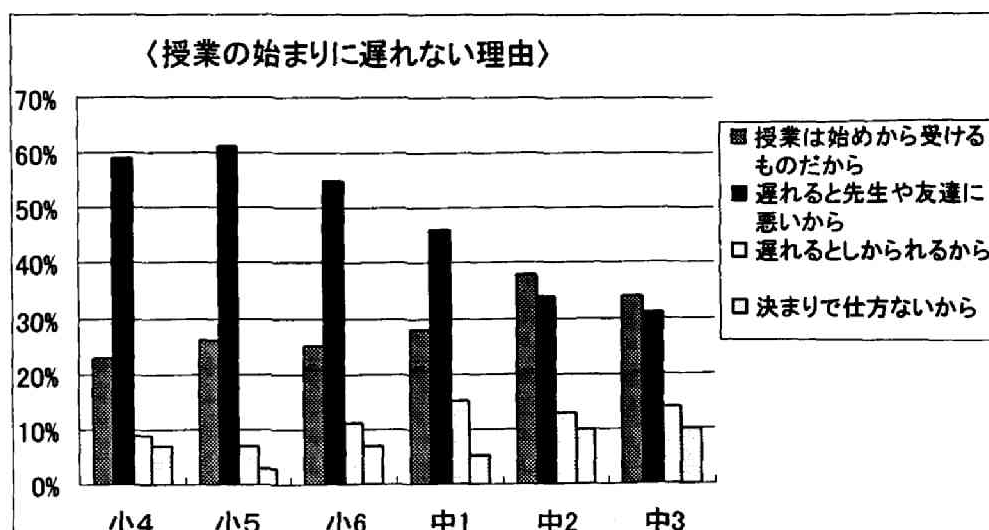
図のように小学校4年生、5年生、6年生とそうじをまじめにする子どもが少しずつ減っているのに、中学校1年生ではまたいったん増える。そして、2年生、3年生と再び減っていく。これは、新しい環境になり、いったん自分を律する気持ちが回復すると同時に、今までの自分を変えてがんばりたいという気持ちが働くからではないかと考えられる。

(3) 規範行動がとれる子どもは、規範の意義を自覚している。



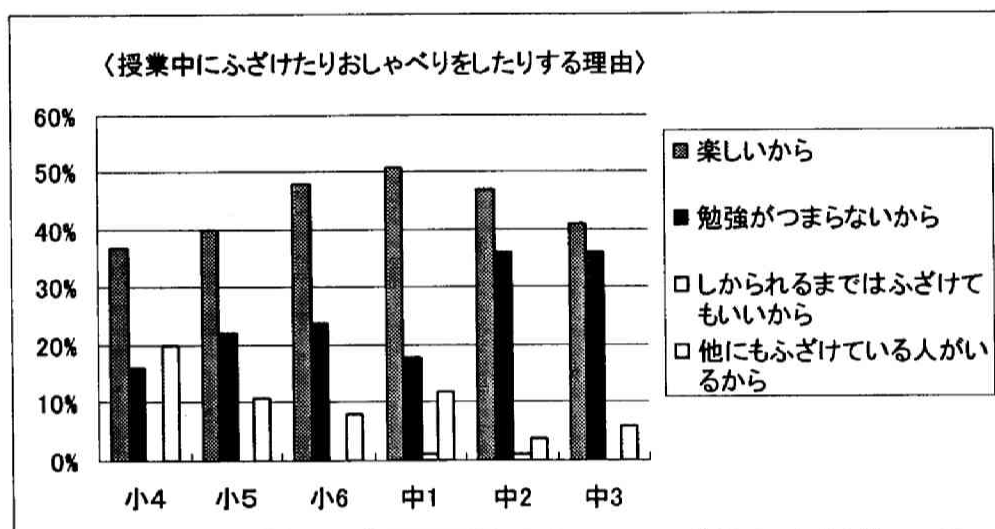
図のように教室や校庭にゴミを捨てない子どもたちの多くは、「汚れてしまうから。」「みんなに迷惑だから。」という気持ちで行動できている。つまり、規範の意義を自覚して行動できていると言える。このことから自律的に規範行動がとれる子どもを育てるために規範の意義を感じる経験を大切にしたい。また、規範行動がとれた時の心地よさを体験させていくことが大切である。

(4) 中学校1年生までは、公共心が規範行動に強く影響している。



図のように授業の開始時刻を守れる子どもの気持ちとして、中学校1年生までは、「先生や友達に悪いから。」という回答が多いが、中学校2年生になると「授業は始めから受けるものだから。」という回答が多くなる。これは、中学校1年生ぐらいまでは公共心が強く、他者の期待に沿い、役割を果たすことに喜びを感じる心理的発達段階であるからと考えられる。しかし、中学校2年生ぐらいになると他者を意識するよりも「自分のためになるかどうか。」という意識が強くなってくると考えられる。どの時期にも公共心を育てることも大切であるが、規範意識をはぐくむ指導では、子どもたちの心理的発達段階を意識する必要がある。規範行動をとることがみんなのためになり、それが自分のためになるという経験をさせることが大切である。

(5) 規範行動がとれない子どもは、自己中心的な気持ちが働いている。



図のように授業中にふざけたり、おしゃべりをしたりしてしまう子どもの気持ちとして、「楽しいから。」「勉強がつまらないから。」という回答が多い。規範行動がとれない子どもは自己中心的ではあるが、自分なりの理由付けをしている。この子どもたちには、ただ叱っても変容はあまり期待できない。規範の必要性を経験させ、規範を守ることの心地よさを体験させることが大切だと考えられる。

Ⅲ 授業にあたって

1 小学校分科会の授業にあたって

(1) 授業づくりの視点

小学校分科会では、アンケートの結果と児童の規範意識に対する発達段階をふまえ、規範意識を育てるための授業づくりに取り組んだ。

その中で児童に味わわせたい心地よさを、

- ①きまりを作り、守ることにより得られる心地よさ
- ②他者とのよりよいかかわりにより得られる心地よさ

の2つととらえ、体育科においての視点を以下のように設定した。

【視点1】

主体的にルールやきまり作りをし、それを守ることで味わえる心地よさを主とした実践

→「ボール運動」「ゲーム」を通して

【視点2】

自己を適切にコントロールすることにより、よりよい他者とのかかわりを味わえる心地よさを主とした実践

→「器械運動（跳び箱・マット）」「表現」を通して

(2) 授業における手立て

上記の視点を授業の中で実践するために、次の6つの手立てを考えた。

- i 集団を意識できる教材を活用・開発する。
- ii 授業に子どもの考えを取り入れる。
- iii 運動や演技をするときのきまりをつくる活動を取り入れる。
- iv 決まりを意識できるように学習カードを活用する。
- v 自分のよさに気づき、心地よさを味わえるような伝え合い・話し合い活動を取り入れる。
- vi 望ましい行動が習慣化できるように、同じ流れに繰り返しひたることのできる学習過程を工夫する。

2 中学校分科会の授業にあたって

(1) 研究主題、仮説との関連

本研究の主題設定の理由から「規範意識はあるのだが、行動化することができない。」ということ、並びに仮説において「自分たちできまりや約束事を作ることで、より積極的にそれを守ろうとし、規範行動が習慣化されるであろう。」ということに着目した。

ここでは自分たちの理想とする中学生の姿、そして現実の自分たちの姿を浮きぼりにし、そこに正面から向き合い、考えさせていくことが規範意識にもとづく行動に結びついていくものと考えた。これによってクラスへの所属感や自己有用感が高まり、自分自身も集団の中の心地よさを味わい自律的な行動が習慣化され则认为る。

(2) 特別活動（学級活動）として実践する理由

学級とは、学校における基本的生活集団であり、教育活動全般において、その基礎になるものである。それゆえその人間関係は密であり、人との関わりが実践的に行われている場であるといえる。

これらのことから、学級において自分たちできまりや約束事を作り、生活していくことが集団の中での心地よさにつながり、自律的な行動の習慣化に大いに役立つものと考え、学級活動として実践していくことにした。

(3) 指導の時期についての考え方

ここで取りあげる実践は、いずれの学年、学級でも可能であると考えられるが、本実践では第3学年にて行うこととした。

今回のアンケートの結果によると、規範意識は学年が上がるにしたがって薄れるが、中学入学時に一旦高まっているということが分かった。ところが学年が上がるにつれて規範行動がとれなくなり、行動がとれている場合でも、2年生を境に公共心が薄れていくということも明らかになった。中学校3年生の時期は、特に意識と行動のずれが大きい時といえるが、逆に中学校生活のまとめとして自らを振り返り、考えを具体化できる時とも考えられる。卒業に向けて学級集団の質の向上を目標として、中学校3年生に本実践を行うものとする。

Ⅳ 実践事例

事例1 (小学校4年 体育)

1 単元名 「ネットボール」 (ゲーム領域・バレーボール型ゲーム)

2 単元のねらい

- ・〔関心・意欲・態度〕自分たちで考えたきまりや約束事を守り、友達と協力して練習やゲームをしようとする。
- ・〔思考・判断〕みんながゲームを楽しむためにルールを工夫する。
- ・〔技能〕打ったりはじいたりしてボールをつなげ、楽しくゲームができる。

3 視点との関連

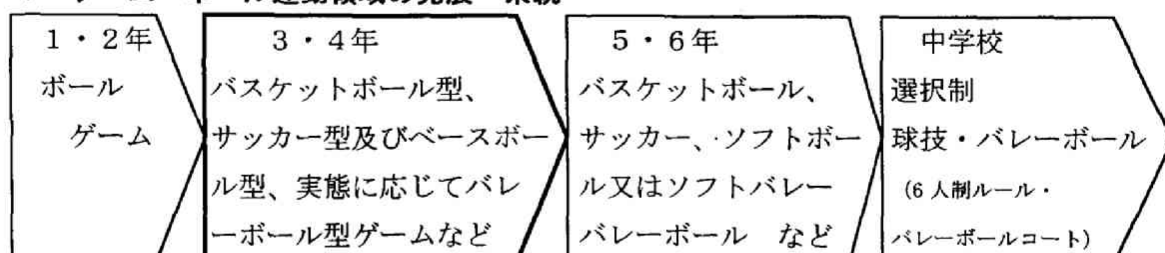
高学年の入り口に立つ小学校4年生は、発達の特性からみて集団の規則や遊びのきまりの意義を理解できるようになってきている。また、仲間から受容されたいという欲求が強くなる

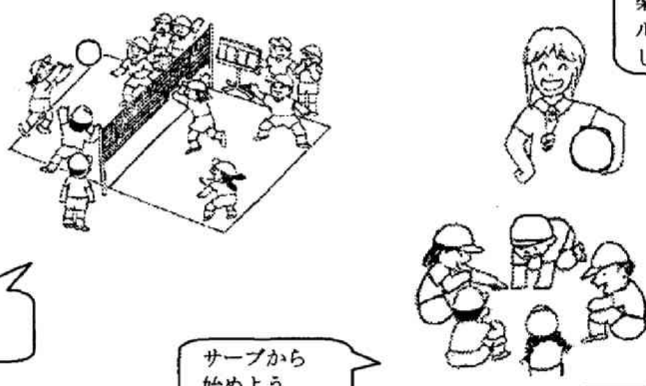
5 学習過程 (45分×6) 学習のめあて 評価にかかわる活動

時	1	2
段階	つかむ・楽しむ	
	準備	
	ソフトバレーボールを使って簡単な運動を楽しもう。 ○ドリルゲームのやり方を知り、運動を楽しむ。 ・円陣パスゲーム ・扇パスゲーム ・対面パスゲーム ・ラリーゲーム 両手を使うと打ちやすいよ。 1、2、3… 友達と共にドリルゲームを楽しんでいる。	ウォーミングアップ 簡単なルールを決め、ゲームを楽しもう。 ○基本のゲームを楽しむ。① はじめのルールは決めています。 うまく打てないな。 続いたね。 ルールを守りゲームを楽しんでいる。 ○基本のルールを作る。① みんなでルールを作っていこう。 みんなが楽しめるルールを考えている。 ○基本のゲームを楽しむ。② ルールを守りゲームを楽しんでいる。 ○基本のルールを作る。② みんなが楽しめるルールを考えている。
45		振り返りタイム
自律的な行動の育成 に関する手立て	i 集団を意識する	ii 子どもの考えを生かす iii きまりや約束事を作る

とともに、相手の立場に立って物事を考えることもできるようになりつつある。この時期の児童にとって集団内できまりや約束事を自ら作る経験を積み、それを守る心地よさを積極的に味わうことは、自律性の育成に重要な活動体験であると考えた。そこで、この点に重点を置き、本単元を設定した。

4 ゲーム・ボール運動領域の発展・系統



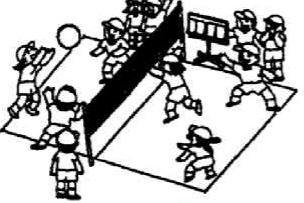
3	4	5	6
工夫して楽しむ			
友達と協力して準備している。			
ルールを工夫しながら、ネットボールを楽しもう。 ○チームの時間 チーム内で教え励まし合いながら、ウォーミングアップや練習をする。 友達と教え励まし合いながら運動している。 ○ルールの確認 ○ゲーム① ○ルールの工夫① ○ゲーム② ○ルールの工夫② ○ゲーム③ ナイスレシーブ! ○ルールの工夫③  みんなが楽しめるルールにしよう。 サーブから始めよう。 いいおうえんができたね。 ルールを守りながら、ゲームを楽しんでいる。 ゲームを振り返り、みんなが楽しめるようなルールを考えている。 身に付けた技能を生かして運動している。 今まで作ってきたルールのよさやルールを守ってきたよさに気付いている。			
友達やチームのよさを具体的に認め合っている。			
iii きまりや約束事を作る iv 自分やチームのよさを伝え合う		vi 同じ流れに繰り返しひたる v きまりを守る心地よさを味わい、それを振り返る	

6 本時の学習 (4/6時)

(1) ねらい

- ・〔関心・意欲・態度〕自分たちで考えたきまりや約束事を守って練習やゲームをしようとする。
- ・〔思考・判断〕みんなが楽しめるようにルールを考える。
- ・〔技能〕ボールをはじきながら体を動かし、ゲームが楽しくできる。

(2) 展開

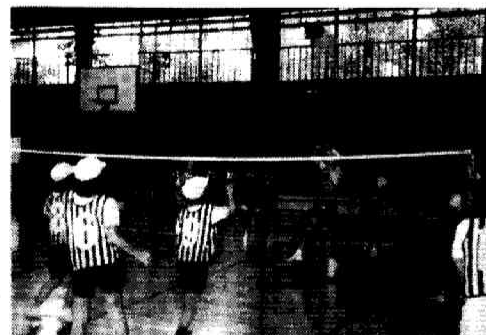
学習活動	支援と評価
1 用具の準備をする。 2 ウォーミングアップタイム 3 チーム練習の時間 丸くなってレシーブ練習しよう。  ・円陣パス ・扇パス ・対面パスなど	みんなで協力しよう。  音楽をかけて時間を区切りましょう。 協力して準備している。励まし合いながら準備運動や練習をしている。
4 ルールや対戦相手の確認をする。 キーワードは「みんなで、進んで、楽しく」 5 ゲーム①  試合開始 6 ルールの工夫① 次は〇〇について考えたい。  やっぱりコートはこの大きさがいい。 7 ゲーム② 8 ルールの工夫② 9 ゲーム③ 10 ルールの工夫③	現在のルールの確認 次のルール作りの着眼点を確認  コートをせまくしてみるのですね。 自分たちの決めたルールを守りゲームを楽しんでいる。 みんなが楽しめるルールを考えている。 ボールをはじき、ゲームを楽しんでいる。
11 振り返りタイム 12 整理体操をする。 13 後片付けをする。 	友達やチームのよさを具体的に認め合っている。協力して後片付けしている。

7 授業を振り返って

今回の授業では、視点1『授業の中で、主体的にルールやきまり作りをし、そのきまりを守る心地よさを経験させる。』ということに焦点を当てて取り組んだ。それを踏まえ、授業の手立てとして挙げた6項目のうち、特に子どもの変容がみられた項目についてまとめた。

i 集団を意識できる教材の開発・活用について

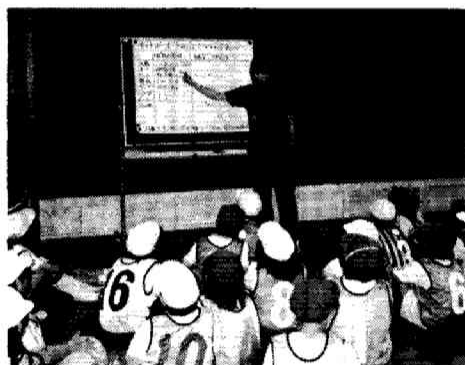
新学習指導要領に示されたバレーボール型のゲームは、現在普及しつつある状況だが、本クラスでは初めて取り組んだ教材である。全員初心者でスタートラインが同じということは、どの児童にも期待感を感じさせ、みんなで新しいことを始める意欲をもたせた。また、ネットや触り心地のよいボールの使用により、走力や腕力に自信のない児童も抵抗感なく参加する喜びを感じることができた。



さらに、ボールをつなげるおもしろさはこの運動ならではの特性で、自然と相手や集団を意識できる教材であった。

ii 授業に子どもの考えを取り入れることについて

日頃の体育授業では運動能力の高い児童に注目が集まりがちだが、既成のルールだけで活動するのではなく、自分達の考えを授業に生かすということは、どの児童にも活躍の場を与えることとなった。友達のプレーをただ見るのではなく、次の話し合い場面に生かせるように意識して見る児童が増えた。上手下手という技能面にとらわれすぎず、多角的な価値判断ができる児童も見られるようになった。ただ、全てを児童任せにするのではなく、考える視点を与えるなど、学年の発達段階なりの教師のかかわりが必要であると感じられた。



iii 運動や演技するときのきまりを作る活動について

ルールについての予備知識はほとんどなかったため、その分先入観にとらわれずに自分達のルールやきまり作りに取り組むことができた。ゲームを始めるにあたって活動しやすさから7つの「始めのルール」を与えたが、その後の活動により3つが変更となり、新たに8つのルールが付け加えられた。本時では、ルール作りに限らず「あいさつをしよう。」などマナーにかかわることや「応援・アドバイスをしよう。」など態度にかかわることの約束についても話し合った。その結果、試合中の児童の表情や言葉が一層明るくなった。ルールの工夫を話し合う回数が増すほど自分達のオリジナル性とルールの必要感を強く感じるとともに、そのルールやきまりを守ることの心地よさを味わうことができた。また、児童にスポーツとしてのルールと気持ちよく運動するためのマナーとの区別を意識させておくと、より分かりやすい話し合い活動になったと思われる。

iv 振り返りができる学習カードの工夫について

今回はチームごとの振り返りカードを用いたため、きまり作りや練習内容に関する振り返りが多く、全体の話し合いに生かすことができた。反面、自己有用感や個人の参加意欲を高めるためには個人カードの方が有効であるように思われた。記入時間の確保などの課題が残り検討が必要である。

事例2 (小学校6年 体育)

1 単元名 「集団マット運動」 (器械運動領域・マット運動)

2 単元のねらい

- ・〔関心・意欲・態度〕友達と協力し励まし合って運動しようとする。
- ・〔思考・判断〕グループのよさを生かした技や構成を考え、調和のとれた演技を工夫する。
- ・〔技能〕自分に合った今できる技で、友達と合わせて回ったり動いたりすることができる。

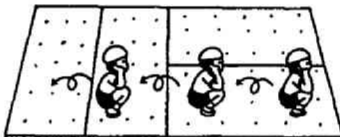
3 視点との関連

器械運動は個人的な運動であるが、本単元では、マット運動の発展として、集団でできる技を組み合わせて回ったり、シンクロさせたりする活動を取り入れ学習を進める。仲間と調子を合わせることの心地よさを共有し合い、楽しみを広げ、さらに仲間のよさを認め合うことができるようにしたい。

5 学習過程 (45分×6)

□ 学習のめあて

⋯ 評価にかかわる活動

時	1	2	3
段階	つかむ・楽しむ	楽しむ	
0	ウォーミングアップタイム・準備タイム		
	敷きつめたマットを使って運動を楽しもう。 ○自由に回ってみよう。 ○2人組で回ってみよう。 どうしたらいいだろう 息が合わないね。  一人よりおもしろいね。 ○3人組で回ってみよう。 もっと楽しくなったね。  一緒にやるのも楽しいね。 学習の進め方を考えよう。 最後には発表会をしよう。 途中で経過報告をしよう。 グループはどうするの。 新しい運動の楽しさや喜びを求めて進んで取り組んでいる。	自分が今できる技や、グループの友達の技を確かめよう。 ○自分のできる技で回ろう。 ○友達のできる技も見よう。 ○ミニミニ即興集団マット運動をしよう。 まずみんなができる技でやってみよう。  グループの動きを考えよう。 ○調和のとれた動きを発見しよう。(兄弟グループで) 一緒に回るときれいだね。  違う技の組み合わせもできるね。 メンバーのよさを生かした技や構成を考えている。	グループの技や構成を考えよう。 ○パワー 動きを合わせてやってみよう。  この技はもう少し練習しないとね。 ○アドバイスタイム(兄弟グループで) ○○のところがいいね。  友達の運動を観察して、よい点や課題を見付ける。 ○パワー アドバイスを生かしてね。 
45	振り返り		
自律的な行動の育成に関する手立て	i 集団を意識する ii 子どもの考えを生かす iii 演技をするときの約束事(構成) iv v 自分のよさに気づき、心地よさを味わう		

また、メンバーの能力や特性を生かして、集団としてのよりよい演技内容を構成したり場の設定を工夫したりしながら、課題の集団的達成の喜びを味わうこともできる。このような体験の積み重ねが自律的行動につながってくると考え、本単元を設定した。

4 器械運動領域（マット運動）の発展・系統

1・2・3年

基本の運動

○器械・器具を使つての運動遊び
楽しく行う。運動の基礎となる動きができる。

4・5・6年

器械運動

○マット運動 → 集団マット運動
新しい技に取り組む。
繰り返す。組み合わせる。

中学校

器械運動

○マット運動
技能を高める。
技がよりよくできる。

4	5	6
伝え合う	工夫して楽しむ	伝え合う

している。協力して運動や演技に合わせた準備をしている。

グループの技や構成を
考えよう。

グループとしてよりよい演技に
なるよう工夫しよう。

リハーサルをしよう。

○グループごとに発表会前の
確かめをしよう。

アップタイム 1



調和のとれた演技を成功させるための練習をしている。

中間発表会をしよう。

○兄弟グループ以外の技や構成
を見合おう。

工夫しているところは
どこかな。

○アドバイスタイム

発表を見て他のグループの良
さや課題を伝え合う。

○アドバイスタイム



友達の運動を観察して、よい
点や課題を見付けている。

発表会をしよう。

○全部のグループの演技を見
よう。

見どころを言ってから
始めよう。

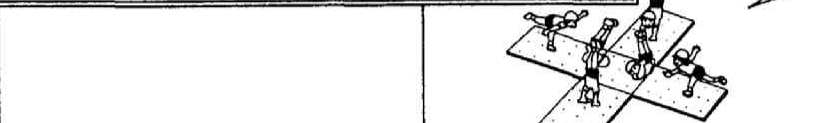


○感想を伝えよう。

○グループは前よりずいぶん
そろっていたね。

○さんの動きを生かしていたのが
よかったです。

アップタイム 2



アドバイスをもとに、グループの動きが良くなるよう考えている。

イム

友達のよさを具体的に認め合っている。

他のグループのよさを認め
合っている。

vi 同じ流れに繰り返しひたる

iv v 自分のよさに気づき、心地よさを味わう伝え合い

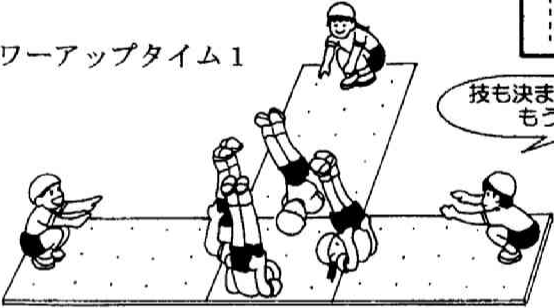
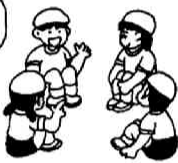
iii 演技をするときの約束事（構成）

6 本時の学習（4／6時）

(1) ねらい

- ・〔関心・意欲・態度〕 練習や中間発表を通して、互いのよさを認め合うようにする。
- ・〔思考・判断〕 グループのよさを生かした技や構成を考える。
他のグループの運動を観察して、工夫している点などを見付ける。
- ・〔技能〕 自分に合った今できる技で、友達と合わせて回ったり動いたりすることができる。

(2) 展開

学 習 活 動	支 援 と 評 価
1 学習の進め方を確認する。 2 用具の準備をする。 3 準備運動・マット慣れ 4 パワーアップタイム 1  技も決まってきたので もう少しきれいに回ろう。 5 中間発表会をする。  工夫しているところは どこだろう。 6 アドバイスタイム わたしたちの演技にも 取り入れよう。  〇グループは こんな工夫をしていたよ。 7 パワーアップタイム 2  よし！ もっと練習しよう。 アドバイスのおかげで 構成がぐっとよくなったね。  8 振り返りタイム 9 後片付けをする。 10 整理運動をする。 11 次の学習の進め方を確認する。	・ 時間配分をタイマーに表示する。 ・ 場の安全を確認させながら行う。 ・ 正しい運動ができるよう声をかける。 用具の安全を確かめて、進んで準備する。 運動に合わせた準備運動をする。 ・ 技の難易度ではなく、調和がとれた技の組み合わせを取り上げ、認める声かけをする。 ・ 必要に応じて、技能のポイントや補助の仕方を伝える。 ・ 相互評価の視点を明確にしておく。 ・ 個人のよさを生かし、調和のとれた組み合わせをしていたグループを認める声かけをする。 アドバイスをもとにグループの演技がよくなるよう考えている。 友達のよさを具体的に認め合っている。 ・ 協力し、安全に行わせる。 ・ ゆっくりと部位のストレッチを行う。 ・ 子どもの考えを生かすようにする。

7 授業を振り返って

今回の授業では、視点2『他者とのかかわりを大切にすることで、自己を適切にコントロールできるようにしたい。』ということに焦点を当てて取り組んだ。そこで、授業の手立てとして挙げた6項目のうち、特に子どもの変容が見られた項目についてまとめた。

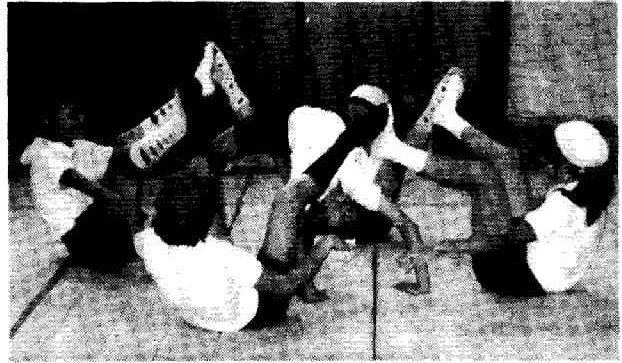
i 集団を意識できる教材の開発・活用

今までのマット運動では、個人の技術向上に目がいってしまいがちだったが、その発展として集団を意識できる活動を取り入れたことによって、運動能力の高い子どもだけが活躍したり、苦手な子どもが臆してしまったりすることが少なかった。

「苦手だからやりたくない。」と思っていた子どもも、集団の一員としての責任から、運動に対して消極的な自分の気持ちを抑えて運動するようになった。またその際、自分

のできる技で参加できたり、仲間に褒めてもらえたりすると、「迷惑をかけないようにしよう。」「みんなと合わせられるようにしよう。」と、次の練習への意欲にもつながっていった。

また、始めは「何だかつまらない。」と感じていた技能の高い子どもも、友達と動きを合わせることや自分の技能を生かす場を経験したことで「もっと時間を延長したい。」と思うようになったり、友達の技の成功を自分のことのように喜んだりする姿も見られた。



ii 授業に子どもの考えを取り入れる活動

今回の授業を通して特に有効だと思われたのは、学習活動の計画を共に考え、掲示しておくことであった。先生に言われたからしかたなくやっている、次の指示を漫然と待つ、ということもなく、学習への主体性が生まれた。また、学習が進むにつれて、運動の時間をより多く確保しようと以前に比べて移動や準備の時間も早くなっていった。

この経験はその後、朗読発表会までの練習計画を自分たちで立てるなど他教科の学習にも生かされた。

v 自分のよさに気づき、心地よさを味わえるような伝え合い・話し合い活動

本時の授業中には子ども自身が『心地よさ』を実感できるまでには至らなかったが、ゆったりした話し合いが取れ、互いに十分よさを認め合うことができた。このようなアドバイスタイムを繰り返し取ることによって、友達とのよりよい関係が習慣化されていき、安定した学習が展開できた。しかし、運動量の確保という点での工夫は必要である。

また、ビデオ等を用いて客観的に自分達の演技の上達を確認することも、この学習での心地よさを味わうためには必要であった。



vi 同じ流れに繰り返しひたる学習過程

同じような学習過程を繰り返すことで子どもたちは安心して学習に参加することができ、各自の目標も立てやすかった。

また、友達や自分の変容を自覚することができたり、主体的な活動を持続、発展させることができたりしたのも、このような学習過程を繰り返してきたからではないかと考えられる。

事例3 (中学校3年 特別活動)

1 単元名「心地よいクラスを作ろう」(学級活動)

2 単元のねらい

- ・討議を通して、理想の中学生と現実の自分達との差を考える。
- ・考えた結果を認識し、理想に近づくためのきまりや約束事を話し合う。
- ・話し合った内容をもとに、それを自ら守ることで、規範意識に基づく行動に結びつける。

3 指導の重点

昨年度の研究員の報告は、話し合いの方法・ルールを守ることを定着化させることで自己指導能力を高め、規範意識につなげることであった。本年度はこの実践を踏まえ、生徒自らが話し合いによってきまりや約束事を作っていく過程を重視し、バズセッション等の方法を用い、内在する規範意識の意識化と行動変容を指導の重点とする。

4 学習過程

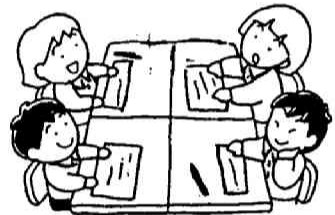
	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
第 1 時 限	理想の中学生について考える ・授業について ・当番活動について ・行事について 以上3項目についての理想の姿を各自考え、ワークシートに記入する。 4人グループで意見を出し合い、短冊に記入し黒板に貼る。 それらの意見をもとに、理想の中学生の姿を浮かび上がらせる。	・ワークシートには、自由に自分の意見を書かせる。 ・グループごとに、話し合いができるよう助言して回る。 ・内容ごとに同じような短冊をまとめ、注目させる。
第 2 時 限	現実のクラスの実態について考える 第1時限と同じ3項目について、クラスの実態について、 ・良い点 ・改善した方が良い点 に分け、各自ワークシートに記入する。 4人グループで意見を出し合い、短冊に記入し黒板に貼る。 それらの意見をもとに、現実のクラスの実態と理想の姿との違いを比較する。	・自分から見た現実のクラスの実態について、素直な気持ちを書かせる。 ・グループごとに、話し合いができるよう助言して回る。 ・内容ごとに同じような短冊をまとめ、注目させる。 ・1時限目のまとめを提示する
第 3 時 限	今後どのようなきまりや約束ごとを作ればよいか考える 理想と現実の違いを認識し、理想に近づくために、どのようにすればよいか意見を出し合い、みんなできまりや約束事を考える。	・理想の中学生と、現実のクラスの実態の良い点、改善した方がよい点をまとめた模造紙を見せる。 ・きまりや約束事が決まったら今から実行することを確認し励ます。

5 本時の活動（本時は2時間目）

(1) ねらい

現実のクラスの実態についてよい点、改善したほうがよい点を明らかにしていく。

(2) 展開

	学 習 活 動	生 徒 の 活 動	指導上の留意点
導 入	・ 前時の確認	・ 教師の話をきちんと聞き、 本時の内容を知る。	・ 前時の内容と本時の内容を 確認させる。
展 開	・ 現実のクラスの実態についてよい点・改善したほうがよい点を考える。 ・ 話し合いをするために、 4人1組のグループを作る。 ・ ワークシートに書いたことを発表して、意見を 交わし、グループとしての 意見をまとめる。 ・ 短冊に書いた意見を黒板 に貼る。 ・ 黒板の短冊を見て、自分 達のグループの考えと同じ点・ 違う点に注目させる。 	・ ワークシートに、各自よい 点・改善したほうがよい点 を記入する。 ・ 速やかに机の移動をする。 ・ 各自が記入したワークシ ートを見ながら、積極的な話 し合いをする。 ・ まとまった考えを短冊に書 く。 ・ グループの代表が項目ごと に分けて、黒板に短冊を貼 る。 ・ 短冊と発表を聞き、自分達 のグループの考えと同じ点 ・ 違う点に注目する。 ・ 問われたことについて、発 表する。	・ よい点・改善したほうが よい点を自分で考えて書 かせる。 ・ 机の近い生徒同士のグル ープとする。 ・ ワークシートに書いたこ とを自分の意見として、 4人で話し合いができる よう、各班をまわり、具 体的な意見が出るように 助言をする。  ・ 内容ごとに同じような短 冊をまとめながら、短冊 に書かれた言葉について 問いかけをする。
ま と め	・ 前時の理想の中学生と本 時の現実のクラスの実態 についてを学習して、次 時の内容について予告を する。	・ 理想と現実の差を知り、今 後どのようにすればよいの か考えてみる。	・ 今後、クラスをさらによ くしていくために、どの ようなきまりや約束事を 作ればよいか、考えてく るよう指示をする。

(3) 評価

- ・ 人の意見をよく聞き、自分の考えを伝えることができたか。
- ・ 現実のクラスの様子について認識できたか。
- ・ 前時の理想の中学生との違いが認識できたか。

「あなたが考える理想的な中学生は」のワークシートに書かれたもの

<授業への取り組み>

- ・授業に対しての発言を積極的にして、授業内容について盛り上がる方がいい。
- ・誰でも自分の考えを遠慮せずに、でも壊されることのない授業が理想だと思う。
- ・みんなが安心して、勉強できる環境を作る。
- ・クラス全員が真剣に授業に取り組む。
- ・みんなが授業に集中できる雰囲気をつくる。

<当番活動への取り組み>

- ・積極的にまた自分の仕事を責任もってやる。
- ・自分から進んでやる。
- ・みんなで協力する。
- ・さぼらない。
- ・決めたことは、最後までしっかりやる。途中でやめない。

<行事への取り組み>

- ・3年生最後の行事なので、くいの残らないよう精一杯やる。
- ・全部が成功するように、みんなで協力してやる。
- ・1人1人が一生懸命に取り組んで、みんなで協力し合って楽しく仲良く頑張る。
- ・やるときはやって、楽しむときは楽しむ。けじめをつける。
- ・話し合って決めたことなどは、しっかり守る。



「現在のクラスについて考えよう」のワークシートに書かれたもの

『良い所』

『改善した方が良い所』

<授業への取り組み>

- | | |
|------------------------|--------------------------|
| ・質問に答えたり、集中して授業に取り組む。 | ・話しが盛り上がり過ぎると授業から話しがそれる。 |
| ・やらなければならないことは、ちゃんとやる。 | ・寝ている人がいる。 |
| ・たくさん発言をする。 | ・けじめがない。 |
| ・真剣に授業をやっている人がたくさんいる。 | ・私語が多い。 |
| ・明るく、とても元気がある。 | ・チャイム着席ができていない。 |
| ・楽しく授業に取り組んでいる。 | |

<当番活動への取り組み>

- | | |
|-------------------|------------------|
| ・みんなが積極的にやること。 | ・さぼる人がいる。 |
| ・一生懸命やること。 | ・掃除を不真面目にやる人がいる。 |
| ・協力したり、分担して活動できる。 | ・適当にやる人がいる。 |
| ・給食などにすばやく取り組む。 | |

<行事への取り組み>

- | | |
|----------------|----------------------|
| ・最後までやり尽くす。 | ・やる気のない人がいるところ。 |
| ・まとまって楽しく頑張る。 | ・ふざけ過ぎることがある。(悪のりする) |
| ・明るく盛り上げられる。 | ・団結するのに時間がかかる。 |
| ・協力し、一生懸命やること。 | ・片づけができない人がいる。 |

6 授業を振り返って

(1) 小集団による話し合いについて

理想の中学生の姿、並びに現実の自分の姿を見つめるために、前段階として個人の考えをまとめさせそれをもとに小グループで話し合いを行った。グループの人数は4名としたため、活発な意見交換ができた。この場面では個々の意見が具体的に表現され深く考えた内容のものが多数あり、後の話し合いの基礎になっている。自ら考え始めるきっかけとなりとても有意義であった。



(2) 意見のまとめ方について

カードにまとめ、黒板に掲示発表したことにより、意見の比較が容易となり、視覚的にもわかりやすいものとなった。同時に時間の短縮にもつながっている。しかし、グループ内では具体的に表現された内容も、まとめて発表する段階になると、思考した過程や具体性が消えてしまい、その結果どのグループの意見も似たようなものとなり、個々の考えは見えづらくなった。

(3) 生徒の課題意識の吸い上げ

本実践により、話し合いを進めることで規範意識は高まる事がわかったが、その意識は変わるものである。そのためアンケートや作文等を定期的に取り入れ、生徒の意識がどこに向いているかを知る必要がある。

(4) 話し合いシステムの定着化

話し合いを円滑に行うためには、その方法が定着している必要がある。それにより個々の生徒も取り組みやすくなり、さらに深化した活動ができるようになると思われる。

(5) まとめ



本実践において最も有意義だったのは、生徒個々がもつ規範意識・行動に関する「問題・課題の具体化」ができたことである。理想と現実を比較することで規範意識を改めて認識したことは新鮮な経験であり、それが行動変容に結び付けていこうとする意欲にもつながることになる。この後は、それをいかに援助していくかである。

V 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) ルールづくりに主体的にかかわる体験によって、児童・生徒の行動は変容していく。

実践事例1では、ルールやマナーの約束を自分たちで作ることによって、明らかに試合中の児童同士のことばかけが変わっていった。実践事例2では、自分たちで立てた演技構成や学習計画を積極的に守ろうとする姿勢が見られた。実践事例3では、理想と現実の姿を比較することで、規範を改めて認識し、そのことが各自の行動変容の意欲に結びついていった。

- (2) 集団を意識する活動を繰り返すことによって、集団の一員としての責任感や所属感が生まれ、自分の気持ちを制御した行動がとれるようになる。

実践事例2では、集団の中で自分がそれなりの役割を負っているという責任感や所属感から、自分の気持ちを制御した行動がとれるようになり、友達とのよりよい関係が習慣化されていった。また、みんなで演技を完成させた達成感や自己有用感を実感できたことによって楽しさや喜びを味わい、さらに良い行動をとろうという意欲にもつながった。実践事例3では、集団の一員としての自分の行動を浮き彫りにすることで自己反省し、集団を意識した望ましい行動を再確認する機会となった。

個人種目や個人的な問題と思われるようなことでも、集団を意識する活動を加えることによって、自らの行動を見直し、制御できるようになっていった。

- (3) 中学入学時に、規範行動をとれる子どもがいったん増える。

小学校、中学校と年齢が上がるにつれて、規範意識も規範行動も低下すると言われているが、今回、小学校4年生から中学校3年生まで、各学年ごとに同じ項目で調査を行った結果、中学校入学時に規範行動をとれる子どもがいったん増えるということが明らかになった。学校が変わるこの時期だけでなく、学年の変わり目や学期のはじめなど、子どもたちの「新たな気持ちで頑張ろう。」という意欲を大切に、その時期に規範に関する指導を繰り返し行うことが大切である。

2 今後の課題

- (1) すべての教育活動を通して、規範にかかわる指導の充実に努める。

小・中学校では、道徳の指導を一層充実させていくこととともに、教育課程の大半を占める教科指導や特別活動の授業を通して、規範にかかわる指導を充実させる必要がある。

本研究では、教科指導の事例として小学校の体育科を、特別活動の事例として中学校の学級活動を取り上げたが、この実践の手だては、そのまま他教科・領域などにも生かせる内容だと考えられる。今後さらに、すべての教育活動を通して規範意識の向上や自律的な行動につながる指導の工夫を重ねていく必要がある。

- (2) 小・中学校の連携の推進に努める。

規範意識の定着や、行動の実践化をより進めていくには、小・中学校の教員が互いに理解を深めていくことが大切である。教育課程の違いなど課題は多いが、共同での研修、授業の公開、異校種間でのTT、児童・生徒の交流などが今後積極的に取り入れられるように働きかける必要がある。

平成13年度教育研究員研究報告書

東京都教育委員会印刷物登録
平成13年度 第41号

平成14年1月23日

編集・発行 東京都教職員研修センター

所在地 東京都目黒区目黒1-1-14

電話番号 03-5434-1976

印刷会社名 株式会社 ドゥ・アーバン